

2021 年度第 2 回研究会（通算第 2 回目）

- 日時：2021 年 7 月 18 日（日）14:00–17:30
- 場所：オンライン会議室
- 共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

「「語」の定義と複合語の分析」をテーマとして、5名のメンバーが口頭発表し、分野ごとに異なる「語」の定義と複合語の分析を情報共有するとともに、活発な意見交換を行った。分野ごとに、「語」の考え方が大きく異なるため、何を「語」とみなすかは、コンセンサスが得られにくいテーマであることを、あらためて共通認識として確認した。

1. 小川 芳樹(AA 研共同研究員, 東北大学)

「生成統語論と通時的構文文法: 形態的緊密性の原理とその妥当性をめぐって」

本発表では、生成文法において、派生語や複合語がどのように形成されるかについての基本的な考え方が、1970年代から2010年代にかけて、どのように変化・変遷し、今に至っているかを概観しながら、形態的緊密性の原理とその妥当性を個別事例に照らして検討するとともに、今後、特に、語から句へ、句から語へというように形態論と統語論の2領域が関係する統語変化の現象を研究する上で、生成統語論と通時的構文文法がどのように協働しうるかについての見通しを探った。

生成統語論の黎明期（1950~60年代）は、独立した部門としての形態論はなかったため、特に生成意味論では、名詞化などの派生も統語操作として扱われていた。Chomsky (1970)以降は、派生名詞に対して「語彙主義者仮説」という用語を用いたことで誤解が広まり、「語の生成に使われる自律的な部門が存在し、さらに語にも句にも互いに無関係な特性が備わっている」とする「語彙主義」の考え方が広まった。1980年代には、Chomsky (1981)が提唱したGB理論の登場により、移動の理論の精緻化が進んだことや、機能範疇が多産されたことで、Baker (1988)によって「編入(incorporation)」が提案され、派生名詞についても、統語部門での主要部移動により派生する分析（=反語彙主義）の提案がなされるようになった時代であるが、これに対するアンチテーゼとしての「語

彙的緊密性 (lexical integrity) の原理」も提唱され、影山 (1993) の「モジュール形態論」などに基づく「語」の内部構造の研究が盛んに行われた時代でもあった。1995 年以降のミニマリスト・プログラムでは、Marantz (1997) らによって、反語彙主義としての「分散形態論」が提唱され、派生語や複合語のような複雑語を統語部門で生成する仕組みが盛んに研究されるようになった。また、1990 年代以降は、反生成文法系の構文文法の中で、言語変化による文法化や語彙化や構文化の研究が盛んになってきたことや、生成文法それ自体が、言語機能の進化論的実在を追求する生物言語学と、言語の変化・変異の説明を追求するカートグラフィやマイクロパラメータ統語論などに枝分かれを始めていることを受けて、特に後者の流派の中で、文法化や語彙化や構文化の統語的説明が盛んに試みられるようになってきている。これらの分野が、通時的構文文法のような反生成文法系の理論と今後協働しつつ言語変化の現象をめぐる謎の解明に取り組む可能性は、十分にありうると思われる。

本発表では、これらの理論的変遷とその収斂の方向性について、生成文法を専門としない研究者にもわかる形で概説を行い、意見交換を行った。

2. 時崎久夫 (AA 研共同研究員, 札幌大学)

「音韻論から見た語と句」

本発表では、語、複合語、句の定義を音韻の観点から明らかにすることを試みた。語を、culminative stress (頂点強勢) を持つ単位と定義することができるかどうかを議論した。また、この語の定義に従って、語、複合語、句の区別を再考すべきことを論じた。

Hyman (2006) が述べるように、すべての語彙的な語には、音韻的に卓立 (prominence) が、少なくとも 1 つの音節にあるとする義務性 (obligatoriness) と、最大で 1 つの音節にあるとする頂点性 (culminativity) を語の基準を仮定した場合、強勢を持たない「語」は語ではないことになる。よって、英語の a, the, she, at のような機能語、中国語の le (了), ma (吗) のような軽声となる語、日本語の「鳥 (が)」のような無アクセント語は、語より小さい単位となり、問題がある。英語で、語幹の強勢位置を変えるクラス 1 接辞 (-ity) と変えないクラス 2 接辞 (-ness) は、どちらも語内の要素として良いのか。また Chomsky & Halle (1968) による、複合語に対する複合語強勢規則 (CSR) と句に対する核強勢規則 (NSR) は、Cinque (1993) で最も深く埋め込まれた要素への強勢付与と

して一般化され、語と句の区別はなくなっている。

韻律理論では、アクセントなどを基に、形態的な語とは異なる韻律語 (prosodic word) を設定している。また日本語の連濁や促音化、中国語の連声などの音韻変化が左枝分かれ構造では起こり、右枝分かれ構造では起きないため、左枝分かれ構造は語の性質を持ち、右枝分かれ構造は句の性質を持つと考えられる。

最後に、日本語の句複合語 (phrasal compound) における語頭の低ピッチと下がり核の2種類のアクセントについて考察した。

3. 佐藤陽介(AA 研共同研究員, 津田塾大学)

「How much should we “Distribute Morphology”? Words, compounds and lexical integrity」

本発表では、分散形態論 (Distributed Morphology/DM) と評される生成文法統語論に依拠する形態理論と、DM における「語」及び「複合語」の扱いに発表した。まず、歴史的俯瞰として、この理論が、1970-1980 年代の生成文法理論研究で既定されている Lexicon という独立の語形成部門を破棄し、その役割を統語部門を中心とする各文法部門に「分散」させる文法モデルを採用していることを述べ、その3つの中心的想定 (遅延挿入, 未指定, 最下部まで統語論) を紹介した。また、これらの想定から、DM は反語彙主義の立場を採用しているため、「語」は「句」とまったく同じように統語部門でのみ生成され、これらの境界は存在しないという仮説を内包していることに触れた。次に、DM における複合語の代表的分析として、Harley (2009) を取り上げ、複合語は root(を含む主要部) の統語的編入を通じて形成されるとするアプローチを紹介した。最後に、以上の DM の簡単な概説の上に、DM について発表者自身の批判的見解を提示した。特に、①DM では「語」は存在しない立場をとるものの、「語性」があることへの説明が不十分である、②実際に行われている DM 流の研究においては、「語」に対応する派生上の位置が図らずも終端節点に確保され、いわゆる語彙論的仮説の想定と実は大差はないのではないかということ、そして、③形態構造と統語構造にずれがあった場合に発動される微調整規則により形態理論としての反証可能性に疑問が残ることを挙げた。

4. 下地理則(AA 研共同研究員, 九州大学)

「宮古語の複合語の語性(wordhood)について」

本発表は、宮古語の複合語、特に形容詞語根と名詞語根の複合名詞（以下、AN複合名詞）を取り上げ、その語性を分析することを目的とした。宮古語のAN複合名詞は、一見すると句とも思えるほど生産性が高く、意味的にも合成的で、各語根の音韻的自律性も高い。一方で、連濁という（句とは異なる）形態音韻特徴を有する点や、複合される語根の接続に制限がある点（例：?japa-azma-an-mucII 柔らかい-甘い-餡-餅「柔らかくて甘くて餡のお餅」 → japa-narrasii#azma-an-mucII 柔らかい-で#甘い-餡-餅「柔らかくて、甘い餡のお餅」）、内部要素の入れ替えが必ずしも自由ではない点など、やはり句と区別すべきドメインであると言える。これらの事実を素描した後、典型的にAN複合名詞をどう位置付けるべきかを議論した。

5. 中山俊秀(AA 研所員)

「用法基盤的視点に立った時の語性の判断基準」

本発表では、用法基盤アプローチの観点から見た「語」という構造単位の位置付けとその特性について考察した。

「語」は、文法体系を構成する基本要素の一つで、通言語的に共通して、明確に、ぶれることなく定義づけられるものと考えられがちである。しかしながら、実際の言語現象を見てみると、こうした前提に反する事象は意外に多い。カナダ先住民の言語ヌートカ語のように複統合(polysynthesis)と呼ばれる極端に複雑な語形成法を見れば、構造的タイプによって、大きな通言語的差異があることは明らかである。また、同一言語内でも、活発な複合語形成や再分析などを通じた形態変化などを見れば、何が「語」をなすか固定的に定義づけられるものではないことがわかる。本発表では、こうした「語」の不確定性を言語使用の実態に結びつけ、言語使用の中で文法体系を捉えることの利点を論じた。